



Title	<文献紹介>ミハイロ・ジュリッチ、ヨーゼフ・ジーモン編集『ニーチェにおける芸術と科学』から Mihailo Djurić u. Josef Simon (hrsg.) : Kunst und Wissenschaft bei Nietzsche, Königshausen und Neumann, Würzburg, 1986.
Author(s)	山本, 哲哉
Citation	メタフシカ. 2016, 47, p. 99-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59487
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ミハイロ・ジュリッチ、ヨーゼフ・ジーモン編集

『ニーチェにおける芸術と科学』から

Mihailo Djurić u. Josef Simon (hrsg.): *Kunst und Wissenschaft bei Nietzsche*, Königshausen und Neumann, Würzburg, 1986.

山本哲哉

ニーチェはどう読まれているのか、どう読まれるべきなのか。こうしたことはニーチェ研究史の中で見るとたびたび問題提起がされている。そうした繰り返される試みは、それ自体がニーチェ哲学の特殊性を反映していると見ることができるだろう。例えば『現代思想』2013年2月号は、「ニーチェはこう言った」という題目で特集が組まれたものであったが、その中で行われている討議も、要するにニーチェを読む、という行為の様々なあり様とその意義とを問題化するものであった。この中でも触れられていた、Cerisy la Salle で主催された十日間に渡る¹ ニーチェ集会 «Nietzsche, aujourd'hui?» とその同名の書籍化である書物² は、こうした問題提起のラディカルなものとしてそれこそ今日では捉えられている。

¹ CENTRE CULTUREL INTERNATIONAL DE CERISY 企画の集会は、プログラムを見てみると分かるように、四日間、一週間など比較的長期間にわたるものが多いのだが、それに比較しても十日間というのはやはり長いと言える。2016年6月に行われた「21世紀にゾラを読むこと」と題された集会は、自然主義文学を代表するフランスの文豪ゾラの現代性を問う野心的なものであるが、期間をみると七日間である。

単に期間の長さを以てしてのみではその集会の意義を問うに不十分ではあるし、取り扱われた対象の重要性を測ることも厳密には適わない。だが、それだけニーチェが当時に熱心に読まれていた、という事をイメージするには、材料としては充分であろう。そして問題は、ニーチェはいかに読まれ、そして読まれるべきか、なのである。

抄訳書『ニーチェは、今日?』（ちくま学芸文庫）で、クロソウスキの翻訳解説と全体の後書を担当した林好雄はその解説で、まさにこうした点を、クロソウスキ発表「悪循環」についての質疑応答の一コマを再現しつつ強調している。また、ドゥルーズの発表「ノマドの思考」は、こうした点を明確に問題提起している。即ち、「ニーチェ」という哲学者、思想家が当時の時代状況に於いていかなる意義を持ち、またいかに読まれているのかに目を向けなければならない、ということ。言い換えれば、左翼のみならず、ファシストたちをも養い育てる「ニーチェ」とはいったいなんであるのか、と問う事。

² 『理想』1984年8月号の特集「フランスの哲学」での須藤訓任論文「わたしの父としてはすでに死んでおり、わたしの母としては生きつづけ……」は、このニーチェ集会についての紹介の意味合いも持っているが、同時にその集会の意義を引き受ける形で、いまなおニーチェを読むとはどういう意味、可能性があるか、との問題提起も行っている。

今回、文献紹介に選んだのは、Mihailo Djurić, Josef Simon 編集の論文集『ニーチェにおける芸術と科学³』である。セルビアの哲学者であるジュリッチ⁴と当時西ドイツの哲学者ジーモンとが共同で進めたニーチェの国際的研究プロジェクトの一環⁵として 1985 年春学期に「ニーチェ、あるいは科学芸術間の関係について⁶」といった題で行われたゼミナールがあったのだが、その成果である。

この論文集は、編集者兩名を含め、Günter Abel, Volker Gerhardt, Friedrich Kaulbach と現代のニーチェ研究において重要な成果を成した研究者が参加して居る。そして、この論文集を概観してみると、先に挙げた *Nietzsche, aujourd'hui ?* と対照が見てとれる。それは例えばジュリッチ論文 “Denken und Dichten in ‘Zarathustra’”⁷ の次のような文章に接した際により強く感じられるものだ。

「[ツァラツストラの言葉遣いは確かに文芸的なものではあるのだが、それは科学としてのいわゆる哲学に根差した思考に由来するのであり、同様その哲学的な意義は科学的とも言い得る。] この言葉遣いは、原始的で前論理的な思考への回帰を告げているのでなければ、（一見そのように映るかも知れないが、）何が何でも独自であろうとする粗野な努力の結晶であるのでもない。その言葉遣いは概念的討議的言語の経験を寧ろ前提しているのであり、この経験を考察の対象にし、この [科学言語の] 経験にはっきりと倣って居るのである。」(S.98f. [] は評者による補足であり、以下同様に用いる。() はここでは挿入的な部分を表現するのに用いた。)

この箇所にジュリッチの付けた注を見ると、ジュリッチが例えばドゥルーズに代表されるような、

³ *Kunst und Wissenschaft bei Nietzsche*, hrsg. von Mihailo Djurić u. Josef Simon, Königshausen und Neumann, Würzburg, 1986.

⁴ Mihailo Đurić (1925-2011) は現在はセルビア国内の都市にあたるシャバツ生まれの「セルビア人」である。この論文集発刊の 1985 年当時はユーゴスラビア社会主義連邦共和国の首都ベオグラードにある哲学研究所に務めていた。セルビア語で文筆家として活動しており、セルビアの哲学文化を牽引する人物であった。Routledge によるオンライン哲学百科事典によれば、ジュリッチは、ヨーロッパ文化の、特にブルジョワの社会の推し進める非人間化という側面を乗り越える為に、晩年はマルクス、ニーチェ、そしてハイデガーの哲学に取り組むことになる。（“philosophy of South Slavs”, <https://www.rep.routledge.com/articles/south-slavs-philosophy-of/philosophy-after-1945>）本論文集も又、そうしたジュリッチの問題意識の圏内に入るだろう。

⁵ “im Rahmen des Inter-University Centre of postgraduate studies in Dubrovnik internationale Seminare zur Philosophie Nietzsches” (S.5)

⁶ „Nietzsche zum Verhältnis von Wissenschaft und Kunst“

⁷ in: *Kunst und Wissenschaft bei Nietzsche*, S.75-100.

「反哲学」Gegen-Philosophie⁸としてニーチェを読む、といった解釈の方向性をはっきりと斥けているのが分かる。ジュリッチによれば、ニーチェは確かに特異な哲学を展開するものの、あくまでも哲学の領域で思考しているものであり、それゆえニーチェの言葉遣いにおける哲学的意義 die philosophische Bedeutung der Sprache Nietzsches を見出さなければならないのである。こうした反哲学の立場に陥らずにニーチェの、思索と詩作とのあいだを捉えなければならない、それがジュリッチの問題提起である。つまりツァラツストラにおけるニーチェの哲学的思考と詩的思考との統一をあくまで哲学的に見極めなければならないのである。

このような「真剣」な取組は、ジュリッチによれば当時まだ行われてはいなかった。

「しかしながら、真剣かつ哲学的な『ツァラツストラ』の解釈は、いまだひとつとして始まってはいない。それは、差し迫った課題である。この課題について、ハイデガーはかつて確かに取り上げたことがある、『ツァラツストラ』がいつれアリストテレスの学術論文と同じ仕方で厳密に読まれるだろう、と示唆しながら。しかしながらハイデガーは同時に、彼自身の頑冥な要請の故にその課題の成就を危うくしてしまったのである。『ツァラツストラ』を近代における主体の形而上学による最重要な成果と同じ「哲学史的」地平において観るといふ、ハイデガー自身の要請である。」(S.78)

ハイデガーはニーチェを読む際に既にある文脈を持っており、その問題意識に引きつけてニーチェを読んでいるのである。ジュリッチはそれをシェリング、ヘーゲル、ライブニッツなど近代の主体の形而上学の歴史にニーチェを置いて読む、と言う問題意識と理解している。

『ツァラツストラ』における詩作と思考との統一とはいかなるものであるのか、問題はこれなのであるが、既存の意味での哲学に『ツァラツストラ』がどれほどに属するのかは明確ではない。『ツァラツストラ』が実は哲学に属しない場合、例えばハイデガーの試みは、単に頑迷固陋な執着に過ぎなくなってしまう。『ツァラツストラ』の意義を問う以前に、それがなんであるのかか

⁸ ドゥルーズはクロソウスキに倣って反文化 contre-culture と言い、また反意味 contre-sens と言う。ニーチェは哲学者なのではなく——というのはそれは一般に、常に深遠と内在性を目指すヘーゲルのような学者であるからだ——反哲学の徒なのである。ドゥルーズによれば、「今日の革命的な課題とは〔党派、国家などといった専制的官僚的な組織化に陥ることなく、いくつかの局部的な闘争のまとまりを見出すこと、すなわち、〕国家装置を作り直すのではないような、何らかの戦争機械を、そして内的な専制的統一性を作り直すのではないような、外との関係におけるひとつのノマド的まとまり」(訳書 188 頁参照、一部語句を整えた)を見出すことにある。「ここにこそ、おそらくニーチェのもっとも深いところ、哲学との彼の断絶の真価を示すものがあります。」(ibid.)

ジュリッチはそのような「断絶」に意味はない、と考えているようだ。とはいえ評者には両者の態度の違いはいわゆる程度問題に見える。ジュリッチもニーチェの産み出すツァラツストラの言葉と哲学的伝統との断絶を語っているからだ。ドゥルーズは知の体系に支配の権力性を見、権力支配と対抗するための革命的知的連帯の在り方を探るのに反文化の象徴としてのニーチェを求め、ジュリッチは権力に対する批判力としての学問的機構を、ヨーロッパ文明に対して批判的な仕方で興す為に、ヨーロッパ文化の只中でヨーロッパに対峙したニーチェの学問観を必要としたのである。紙幅の都合上詳細は割愛するが、ジュリッチの研究書より次の一節を引用する。ジュリッチの目的は学問的営為を通しての革命であり、そのためのニーチェ解釈である。„[...] daß die Philosophen bis jetzt die Welt nicht verändert haben, weil sie diese nicht hinreichend radikal interpretierten, so daß an der Zeit ist, dies anders zu versuchen.“(Nietzsche und die Metaphysik, de Gruyter, Berlin und New York, 1985, S.317. Die Klammern zeigen Rezensenten Zusätze.)

不明確なのだ。この点、そもそもニーチェ自身が一貫しているとは言い難いのである。「詩とアフォリズムの集成」「五番目の福音書」「まだ名を持たぬもの」「音楽にして交響曲」等等。ニーチェが『ツァラトゥストラ』を表現する仕方は多様である。『ツァラトゥストラ』とは要するになんなのだろうか？⁹

加えて、ニーチェは『ツァラトゥストラ』について言っている、それは文芸には属さず、言わずもがなあらゆる文芸的なものから隔たれている、と。この点について、ジュリッチによれば深い理由が存する。曰く、実はニーチェは文学の哲学からの別離に対抗していて、『ツァラトゥストラ』の純粋に文芸的な価値が強調されることで、その抜きん出て哲学的な意義と性格、つまり哲学への本質的な関係が見えなくなってしまうのではないかと恐れていたのである。(S.80f.)これを要するに、ニーチェは『ツァラトゥストラ』について、わかり良い説明を与えるために文芸のイメージを用いるものの、主眼はあくまでも哲学にあるのである。それゆえ、ツァラトゥストラの詩的言語はある思考内容に分ち難く結びついているのである。

さて、『ツァラトゥストラ』は哲学的意義に主眼を置く作品であることが言われたのであるが、それは一体何を意味するのか。

「『ツァラトゥストラ』がニーチェにおいて最重要の哲学作品である、そうニーチェは確証するのだが、そのことで彼が何を意味しているのかを確定することはむづかしい。」(S.82)

「『ツァラトゥストラ』がニーチェ自身の「哲学をまるごと」含む、という主張は、『ツァラトゥストラ』ではニーチェは単に彼の課題の「肯定的な部分」を遂げたに過ぎないとする別の主張と一貫しない。」(S.83)

自身の作品の連関についてニーチェが説明を施せば施すほど謎は深まる。いや寧ろ、謎を深めるための説明を施しているかのようである。『善悪の彼岸』によってニーチェは、自身の哲学の否定的批判的な部分を始めた、と言う。それゆえ『ツァラトゥストラ』は単に肯定的な部分に過ぎない、と強調する。さらに事情はむづかしくなる。ニーチェが、『ツァラトゥストラ』の前に書かれた『曙光』『悦ばしき知恵』に書かれていることは全てツァラトゥストラの注釈たりうる、と述べるからだ。また後年ニーチェは『善悪の彼岸』が『ツァラトゥストラ』の注釈のようなものであるとし、ただしそれがどれだけ解説となっているのかを見て取るのはむづかしく、ただニーチェの哲学をよくよく理解していた者のみがそうしたことを理解できる、と強調するのである。絡まる作品群。要するに、『ツァラトゥストラ』の哲学的成果について手がかりを得ることはむづかしい、ということである。差し当たり言えるのは、『ツァラトゥストラ』を中心として直接に先立ち、あるいは後続する作品として上の三つがある、ということである。(S.83.)

⁹ 本論文集編集者でもあるジーモンによれば、『ツァラトゥストラ』の捉え方についての多義性について、『ツァラトゥストラ』自体が哲学であれ芸術であれそれであるべきところのものからの逸脱を表現しているのである。こうした振る舞い自体が、ニーチェの思想の表現なのである。(cf. Nachwort von Josef Simon, *Also sprach Zarathustra*, Reklam, 1994. S.363)

ジュリッチはこうした点について、従来の意味における「形式」と「内容」との対立が『ツァラツストラ』においては無効であり、『ツァラツストラ』においては、普段ならば「形式」とされるようなものが「内容」として感覚されねばならないとするニーチェの記述を重視する。(S.85)

「だれであれ非芸術家が「形式」と名づけてしまうようなものを内容として、「事柄自体」として感覚することによって人 man は芸術家となる。人 man は無論そのことによって逆転した世界内に属することになる、というのも最早その人 einem にとっての内容、即ち我々の生 unser Leben は単なる形式的なものに数え入れられるだろうから。」(KSA13, S.9. ここでの unser Leben は sein Leben と解する¹⁰。)

『ツァラツストラ』という作品の意義、位置付けについてニーチェが語ることをそのまま受け取ってしまうと混乱するが、その文芸的外見と哲学的思考とを一体として提示しようというニーチェの振る舞いに注意すれば、「形式」と「内容」との揚棄 *Aufhebung* (S.89) が鍵であると気付く、そうジュリッチは考えるのだ。『ツァラツストラ』においては、思考も詩作も、従来の意味では行われておらず、既存のものとは別の、全く新しいものになっているのである。それはさながら詩作する思考 *dichtendes Denken*、あるいは思考する詩作 *denkendes Dichten* であるとジュリッチは言う¹¹。

このことはニーチェ自身の言葉で次のようにも言い直される。「「思考され」る前に、既に「詩作され」ていなければならないのだ¹²。」詩作は思考に優越する地位が与えられている¹³ (S.86)。

「詩作が思考の未発達な形式である、とニーチェが措定する中で、ニーチェは現実的認識などありはしない、という点に迫ったのだ。虚構、見せかけ、欺瞞などは人間知性の活動の本質的な指標なのだという点に。」(S.87)

¹⁰ man が wir の意味で用いられることは一般的な用法であるが、一文の中で両者が混ざるのは珍しいように思う。しかし文脈上、意味からの混交が起こったとここでは理解する。ジュリッチの読み方にも適う。

¹¹ ここでジュリッチが蘭田宗人の研究に注で言及しているのは興味を引く。ジュリッチの参照は蘭田が *Nietzsche Studien* 第一巻に寄稿した論文“Zwischen Denken und Dichten”であるがこれと同名論文が『ニーチェと言語』に収められている。そこから関連箇所を引用する。「少なくとも中期以後のニーチェは、認識か詩かという問題を、単純なかたちでは提出もしないし断じもしない。むしろ彼は、両者の抜き差しならぬジレンマをそのままに体験しようとする。この逃げ道のない立場に立って始めて、「認識を捨てて詩へ」ではなく、「認識そのものを詩へ」というニーチェ本来の生き方が自覚されるのである。」(蘭田『ニーチェと言語』141頁。)

晩年のニーチェは『悲劇の誕生』に付した序言「或る自己批判の試み」で言っている。「それは歌うべきであった、この新しい魂は。語るべきではなかったのだ。」ここに思考と詩作との重大な関係が示唆されているのだが、蘭田はこれをニーチェの一貫した問題意識として捉える。そして『悲劇の誕生』で必要であったと後年のニーチェが述懐するところの言葉が『ツァラツストラ』で獲得されると解釈する。ニーチェという魂は『ツァラツストラ』で初めて自身の言葉を獲得したのである。

¹² KSA13, S.550.

¹³ アーベルもまた、科学に対する芸術の優越をニーチェと共に主張している。アーベルは①ニーチェの科学批判をニーチェ自身によって相対化し、②科学的認識が成立するための世界観が解釈として科学自身により創造される事、続いて③芸術が感性的経験をその世界観に基づいて行う表現が、認知的活動としては科学的認識に先立つ事を指摘する。そして④芸術と科学的真理との関係について、生に奉仕するかという観点から両者を比較し、素描する。芸術は科学に先立つのであり、どちらも生に奉仕する。アーベルはニーチェと共にその側面を強調する。„Wissenschaft und Kunst” SS.9-25

人間の認識の根本には虚偽がある。この点について、『ツァラツストラ』の「詩人について」に「我々はあまりに嘘をつきすぎる。」とある。ここの「我々」とは詩人たちのことなのだが、ツァラツストラは wir と一人称で語っている。ツァラツストラは詩人を批判し、そこから離れているのだが、詩人の列に並びもするのである。

ニーチェが詩人、というとき念頭にあったのは悲劇時代のギリシア人たちであろう¹⁴。ニーチェが自身をして「悲劇哲学者 *tragischer Philosoph*」とする時当然ディオニュソスのものの哲学的表現が意味されているのである。ニーチェはそれを酒神讃歌 *Dithyrambus* と言い、自身がディオニュソスの表現者として一流であることを自負している。

ジュリッチはしかし、こうした悲劇哲学者としてのニーチェではなく、プラトンのニーチェに注目する。というのも、ニーチェ自身がプラトンとの関係を問い直しているからである。

「タイヒミュラーを読んでいて、僕は驚きで固まってしまったよ。僕はなんとプラトンを知らなかったことか、ツァラツストラはなんとプラトンの的である *platonizei* のかと¹⁵。」(S.92)

しかしながら、ニーチェがこの言葉で一体何を意味しているのかについてはあまりはっきりしない。両者の比較から見えてくるものがあることもまた事実であるが、ただ、ニーチェが明確な定式を与えていないため、この点人は推測せざるをえないのだ。

「したがってニーチェは正しく『ツァラツストラ』をプラトンと関係付けた。ツァラツストラのプラトンの背景を正当にも強調したのである。おしむらくは、ニーチェがこの、どの観点からしても重要な発見をより詳しく説明してくれてさえいれば、あるいは少なくとももう少しわかりよく定式化してくれてさえいれば、と思う。」(S.100)

「ただここで考察の対象となるこの構造的な対応とはいかなる種類のものであるのか？『ツァラツストラ』をプラトンの対話篇とかくも近くに、比喩的であるにせよ我々が正しく模倣について語ることができるという程に近く寄せるものとはなんであるのか？驚くべき隔絶にもかかわらずの両者の類似はどこにあるのだろうか？」(S.97)

この比較を遂行し、ニーチェの意図を理解するためにはプラトンに由来する哲学伝統における哲学言語と『ツァラツストラ』の言語とを真剣に比較しなければならない。ジュリッチはそう強調する。これは、『ツァラツストラ』における思考と詩作との「恐るべき総合」を理解する、という点についてジュリッチが付けた注 (S.79) で引用されたフィンの次の言に対応する。

¹⁴ ジュリッチはここでは触れていないが、例えばヘラクレイトスの遊戯思想との関わりはしばしば指摘される。Günter Wohlfart, *Also sprach Herakleitos, Heraklits Fragment B52 und Nietzsches Heraklit-Rezeption*, 1991. Eugen Fink, *Nietzsches Philosophie*, 1960.

¹⁵ Postkarte an Franz Overbeck vom 22. Oktober 1883 (KGB III 1, 449)

「もしひとが、度を越してけばけばしく、比喩だらけで酔っ払っておしゃべり好きな声をのみ聴いたのだとすれば、『ツァラトゥストラ』を読んだとはいえない——もしひとが比喩を思考に移し入れることができないというのであるならば。ニーチェの直感的幻視的な文体は普通はとても同等の才能でもって理解されはしない。我々〔凡人〕は一語一語地道に苦勞して読まなければならないのだ、もしもニーチェ思想のこの激烈な象形文字を解読しようとするならば。」(Nietzsches Philosophie, S.103)

ジュリッチはニーチェを神秘家にすることなく、真摯に解釈に取り組むことを要求する。具体的には哲学的伝統との関係を見極めながら読み進めることが重要だと主張するのだ。本論文では言わないものの、ジュリッチにとってはそれが、全ヨーロッパ化されつつある世界にあって人がヨーロッパ文化の危機に立ち向かう為に必要なのである。

(やまもとてつや 現代思想文化学・博士後期課程)